
賞金首と果てある世界

河藤 汐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賞金首と果てある世界

【Nコード】

N6766M

【作者名】

河藤 汐

【あらすじ】

事故って天国みたいなところに飛ばされて気が動転してそこから逃げ出して迷い込んだ先は異世界？ しかもそこでの私の扱いは『賞金首』？ は？ な少女と曰くつきの少年のひと夏のお話。

登場人物等紹介（前書き）

話の本筋に関わらない程度のネタばれがあります。

登場人物等紹介

【登場人物】

永田 有菜 ながた ゆつな

この話の主人公。日本の中学二年生で女。交通事故に巻き込まれたせいで天国にとばされ、そこから逃げ出そうとく果である世界へに迷い込んだ。ある理由から首に賞金をかけられている。

小御門 こみかど

いわく付きのもう一人の主人公。男。天人あまとの下っ端。

アルド

男。く果である世界へのヴァレス人。賞金稼ぎ。ルミナと二人で『アルミ夫妻』で通っており、通称『アルミの旦那』。

ルミナ

女。く果である世界へのヴァレス人。賞金稼ぎ。アルドと二人で『アルミ夫妻』で通っており、通称『アルミの女房』。

お頭 かしら

男。ある団体の頭領。

ターニャ

女。お頭の率いる団体の団員。

一二藍 ふたあい

男。神様の秘書的な存在。多くの天人あまとにく神の手足秘書と敬われている。

轟とていぎ信之のぶゆき

男。天人あまとの下っ端で、小御門こみかどの同僚。

リタ

女。天人あまとの下っ端で、小御門こみかどの同僚。

藤本ふじもと

男。その他詳細はいずれ本編で。

【用語】

< 果てある世界 >

主人公が迷い込んだ世界。

天国

この世とあの世の狭間にある世界。

天人あまと

天国に住む人間。亡霊をあの世、または地獄まで送り届ける。ある事情によりこの世から離れて暮らしている。

この世

生きている人間がいる場所。

あの世

死んだ人間がいる場所。（例外有り）

地獄

生前に罪を犯した者が永遠に罪を償う場所。

生命いのちの泉

あの世でしばらく時を過ごした亡霊、あるいはまったく新しい生命いのちがこの世へと生み出される場所。

ブローグ

かつと、体が熱くなった。

それが恐怖のせいなのか、怒りのせいなのか、はたまた絶望のせいなのかはわからなかった。滝のように吹く風をうけているのに、体は一向に熱を冷ましそうになく、むしろ体の温度は上がっているように思えた。体中を巡る熱流は、いずれ炎をあげて俺の体を燃やし尽くしてしまうのではないかというほどの勢いで、じわじわと体を蝕んでいく。

——嘘だ。

喉から出たのはもはや声ではなかった。掠れた悲鳴。つん、と瞼に微かな痛みを感じる。

嘘だ。嘘だ。嘘だ。心の叫びとは裏腹に、真実を決定付けるように、たった今見た光景が頭の中にフラッシュバックしてくる。

突然背中に加えられた強い力。壊れかけのフェンスに食い込む手。体は二つに折りたたまれ、目に入るのは二人分の足。片方は動かず、片方は大きく揺れて——一瞬で消えた。同時に、空へと放り出された体。そんな自分をなんともいえない表情で凝視する……。

「——うわああああっ！」

頭の中に映し出される映像から逃れようと、叫ぶ。

嫌だ。嫌だ。そんな事、信じたくない——信じられない。

視界に映し出された馴染みある景色を見て、俺は両手で顔を覆った。

嗚呼。

言葉が続かない。

何気なく耳をすませば、周りは雑音と風音と悲鳴に入り塗れている。

うるさいな。

俺は微かに眉を顰め、両手を広げる。

ぐちゃり、と何かが壊れる音がした。

プロローグ（後書き）

『賞金首と果てある世界』をご覧頂きありがとうございます。河藤
汐と申す者です。

夏休みを使つていつもと毛色の違う小説を書きたいと思い、

この度はこの場を借りてこの小説を投稿させて頂く事となりました。
理想は夏休み中に本編の連載を終了させ、番外編をぼちぼち上げて
完結マークを押す事なのですが、あくまで理想ですので実際はどう
なるかはわかりません。なるべく努力をしますが、話が長くなる事
も考えられるので、そこらへんはご了承下さい。

そしてタグにある『一人称二視点』についてですが、登場人物等紹
介をご覧の通り、一応この小説の主人公は二人となっております。
検討した結果三人称より一人称の方が読みやすいと私が判断し、こ
の形をとることにさせて頂きました。

しかし、二人の内の一人は前半、ほとんど出てきません。なので最
初の方は普通の一人称です。この事をふまえてお読み下さい。

では、拙い文章ではございますがどうか最後までお付き合い下さい
ますよう、宜しく願ひいたします。

01 はじまりの扉

痛いっ！

猛烈な痛みが体を貫いた。車がへこむ鈍い音。あちこちから聞こえるクラクションの音。人々の悲鳴、ざわめき……それらをぶちのめすような勢いで私は痛覚に囚われた。頭の中は真っ白に、ではなく真っ暗闇に覆いつくされた。ふが、と苦しい自分の声が耳を刺激する。

同時に、視界が明るくなった。

見事に真っ白だ。上下左右前後どこを見ても、白。ただ白いだけ。私はその場で棒立ちになる。自然に眉間に皺が寄り、目に入れる力が強まった。

なにこれ、どうなってるの一体。

地球温暖化とか、マジで死んでよ。

ああもう、と私は鼻息を荒くして立ち上がった。拭っても拭っても流れ落ちてくる汗。タオルは既にびちょびちょで、もう一枚持ってくるんだったと舌打ちをする。

「ねえ、私のシーブリーズ知んない？」

たしかここに置いといたはずなんだけど。ついこの間発売されたグリーンアップルの香り。意外に好みの香りで、密かにお気に入りがだった夏の必須アイテム。あれがなきゃ、私は家に帰れないのに。夏の間、私は学校に来るだけでも汗がだらだらなのだ。あれがなきゃ体が熱でやられてしまうし、第一汗臭くて不愉快。

知らない、と周りの人間は口々に答える。どこか無意識に別のところに置いてしまったのだろうか、と私は辺りを見回した。むんむんと嫌な空気に溢れる剣道場。今はもう活動時間を超え、皆それぞれ防具を外し、更衣室へと向かっている。

誰か、間違えてもってっちゃったのかな。

私は肩を落とした。あーあ。こんな事になるなら、ちゃんと名前書いてくんだった。また買えないかなあ。まだ結構残ってたのに……最悪。

項垂れる。すると背後から人の気配がして、ゆっくりとした動作で私は振り返った。

「何か用？ 萩原」
なん はぎわら

顎をしゃくる。萩原はにっと笑うと、はい、と例の物を差し出した。たいして身長は変わらないのに、自分よりずっと手が大きくて、ああ男なんだなと何気なく実感する。

「……あんたさ、人に物を借りる時はちゃんと言いなよ」
「わりわり」

萩原はお調子者だ。調子よく適当に謝ってくるのが、はつきり言っただけに障る。私は乱暴にシーブリーズを奪い取り、フンと鼻を鳴らす。

「グリーンアップルって、アレだろ。新発売のヤツ。俺初めて使ったけど、結構いいなそれ。クールパッションのが好きだけど」

「別にあんたの好みなんて聞いてないし」

私は素っ気無い態度でそう言った。ああ、イライラする。

「うわっ、ひでえ」

萩原は大げさにショックをうけたような表情かおをして、すぐに普通

の表情に^{かお}戻った。それ、と私が手に持っているシーブリーズを指差す。

「それ、つけないの？ 永田^{ながた}」

「つけるよ」

私はぱちん、と指で蓋をはじき、掌に適量の液体を出した。そこからへんにシーブリーズを置いて、肌にはビチャビチャとつけていく。すると、みるみるうちにつけた場所からひんやりとした冷気が溢れ出てきた。首が竦む。

足りないな。

もうちょっと、と私はシーブリーズを再び手に取り蓋を開ける。けれど藤原がそれを取り上げ、自らの手に液体を出した。

「俺がつけてやるよ」

そう言うと、藤原は慣れた手つきで私の首筋を濡れた手でなぞった。その妙な感触に鳥肌が立ち、私は後ずさる。

藤原は嘲笑ともとれそうな微笑を浮かべ、さっきなぞられた所をじっと見つめた。

「は……えろ」

その言葉で、一気に体中の熱が顔に集まった。

私は藤原を睨みつけ、奴の手の中にあるシーブリーズを奪い取る事もせずにその場を後にした。

明日から夏休みか。

私はさっきコンビニで買ったキャラメル・マキアートを片手に、時折それを口に含めながら、たらたらと帰り道を歩いていた。もう時計の短針は七時を回っていたけれど、空はまだ暗くなかった。ここまで明るい、部活が終わった気がしない。

「夏休み、ねえ」

授業はないし、宿題は出るけど皆で分担してやればすぐ終わるから、基本夏休みは好きだ。けれど、夏休みはずっと部活がある。剣道はやっててすごい楽しいけど、正直同じ部活の仲間……主に萩原の存在が不愉快だ。奴は二年の中じゃ女好きで有名で、いろんな女に手を出しているとあちこちで噂されている。だからってどうこう言うつもりは別にないけど、その被害を自分が受けるとなれば話は別。奴が私に絡んでくるようになったのは期末が終わった頃からで、いままではクラスが違うのもあってどうにか耐えていたけれど、明日からは毎日ずっと部活。正直、やってらんない。

適度にサボるか、顧問に相談して部活をやめるか。

けれどうちの部は厳しいし、顧問は稀に見るカタブツ野郎だ。どちらにも到底無理。私は徐に^{おもむろ}ため息をついて、歩く速度を落とす。

……できるだけ一人で行動しなければ、大丈夫だよな。

なにも奴が本当に私をそういう目で見ているかは決まったわけではないんだし、と私は手を握り締めた。もしもの時は急所を蹴って持ち前の足で逃げればいいし。

そうもんもんと考えていると、後ろでクラクションの音が鳴った。しかし後ろを振り返るよりはやく、体がどんっと何かに押された。遅れて凄まじい痛みが体を支配する。

一瞬にして、視界が真っ暗になり、明るくなった。

え？

首を傾げる。今、自分の身に起きた事が理解できない。一体ここはどこだろう。不気味なくらい真っ白な空間に気圧され、私はその場から動けずにいた。

なにこれ。一体なにがどうなってるわけ。

気分が悪くなる。私は口元を手で押さえ、やっとこさその場から動き出した。一步、一步、当てもなくその場から歩き出す。

ええっと……たしか、クラクションが鳴って……それから、体がぐわんってなって……。

「え」

今起きた事を整理しようの一つずつ思い出していつて、私は血の気が引いた。クラクション。痛覚。見慣れない、変な場所。

「え、ちょ、待ってよ……え？ え？」

もしかして。いや、そんな馬鹿な。

しかし一度疑ってしまうと、急に自分が怖くなって体が震えた。

震えは徐々に大きくなり、歯がガチガチになった。

「え……うそ……いやっ」

死

一文字の言葉が頭の中を支配する。なのにそれについて何か考える事はできなかった。ただ震えて、目を見開いている。

しかし今までなかった扉が開き一人の人間が入ってきて、一瞬だけその言葉から解放される。

けれど、その人間の姿を見て私は硬直した。

「あ、無事に送られたようですね」

小説に出てきそうな形の白い服。栗色の髪の毛に瞳。人間離れした顔の造形……いつもなら目にしたら小躍りしてしまいそうな美人が、今では恐怖の根源にしか成り得なかった。

「ふ……あ……」

「ん？　どうかなされまし——え?!」

私は何も考えずにその人間を押しやり扉の向こう側へと走り出した。後ろからさっきの人間が何か言っているのが聞えたが、止まるという発想はまるでなかった。尚続く真っ白な空間を全速力で走るじゃないと、何かに捕まりそうで怖かったら。

——天使みたいな人。

私は声なき声でつぶやいた。すると、突如とてつもなく大きな扉が目の前に現れた。

後先も考えずに、目に入ったドアノブをぎゅっと握る。

私、死んだのかも。

そう察しながらも、私は現実から目を逸らすように、扉の向こうへと足を踏み出した。

02 異世界の果て

踏み出した足は地につかなかった。

「わわっ」

勢いよく足を踏み出したせいか、私は勢い余って頭から落ちる。ごすんつと鈍い音と痛みが頭の中に響き、私はその場に倒れこんだ。そして頭を抑えながらからかうように上半身をおこす。

「ったあ……は？」

私は辺りを見回した。どこもかしこも白い。と言っても、さっきいた白い空間とはまるで違かった。灰色の空。真っ白の、雪。雪はスカートをじわじわと濡らしていく。

は？

私は目を瞬き、しばらくぼうっとしていた。一通り時間がたつと、私はここがとても気温が低い事に気づいた。半そでからのぞく腕に、冬の様な冷気がまとわり付く。

何これ……ワケわかんないんだけど。

寒い。ぶるつと体が震え、私はその場で体を小さくする。寒い。絶えられない。

「どうなってるの……」

私は弱弱しく口に出した。同時に今自分の身に起こっていたことが頭の中ではつきりと形を成し始めていく。

体中を貫いた猛烈な痛み。多くのクラクションの音。悲愴じみた悲鳴。暗転。突然の空間転移。天使のような人。そして……雪原。

私はわなわなと震えている唇をかみ締めた。錆びた鉄の味が口内を満たしていく。

何が起こきたの。

私は自分の体をあちこち触り、猛烈な痛みの根源を探そうと試みた。だがそれらしいものは見当たらず、戸惑う。

どこも、怪我をしていない。

おかしいな、と私は首を傾げる。おかしい、たしかに怪我をした
と思ったのに。

私は自分の体をぎゅっと抱きしめ、視線を地面に彷徨わせた。ス
カートはすっかりびしょびしょに濡れていて、肌は堅くつっぱって
いる。

はら、と冷たい何かが頬を掠った。

「……なんで……」

雪が降り始めた。

はらりはらりと、大きな、けれどやわらかい結晶のまとまりが
降ってくる。

……夢、なのかな。

今の時期、日本で雪なんて。私はぼんやりと舞い落ちる雪を見な
がら思った。そしてこうも。

てつきり私は、自分が死んでしまったんだって思ったのに。

だからさっきの場所を天国だと、さっきの人を天使だと思った。
思ったうえで逃げ出した。けれど今の私には体がちゃんとあるし、
感覚もしっかりしている。死んだ、とはとても思えなかった。

加えて、今日の前に広がっている光景。

今朝起きた瞬間から、全部ひっくりくるめて夢なのだと思った。

私は小さい頃から夜中見た夢は、朝起きてもしっかり覚えている
方だった。だから、夢がどれくらい非現実的なのかを知っている。
代表的なものは、学校の廊下を歩いていたら、いつのまにか家の階
段を上っていた、だとか。顔も名前も知らない人と、まるで自分た
ちが友達であるかのように楽しく話していた、だとか。とにかくそ
んな感じの夢を、小さい頃からよく見ていた。

けれど、夢を見ている間に夢を夢だと認識したことは、今回が初
めてかもしれないかった。

「まあ、そういうこともあるよね」

夢は謎が多いと言う。なら、これは特に不思議ではないのかもし
れない。

よかった、と私は安堵のため息をもらした。

よかった……死んだわけじゃ、なかったんだ。

心からの笑み。私は心臓が温まるのを感じた。ふわふわした感覚に支配される。

「でも、さすがにこれは寒すぎ」

二月の寒さに似ている。ここにずっといたら凍死しかねないなど、私はゆつくりとその場に立ち上がった。夢なら死ぬ事はないだろうが、それでも寒いのは耐えられなかった。

しかし足に電撃の様なものが走り、私は渋面をつくった。

「……っつ」

やばい、足捻ったかも。

さっき、地面に倒れた時だろうか。すると私は急に思い出して、辺りを舐めるように見回した。

「……ない」

扉が。

やっぱりこれは夢なんだなと実感した。リアリティがまるでない。私は腕をさすりながら、どうしたものかとため息をついた。立ち上がったからって、この寒い空間から逃げ出せるわけでもなんでもない。ましてやこの足ではろくに歩けないはずだ。かといって、このままこの場所にいる事が私にできるだろうか。……否、できない。そこまで結論を出して、私は不自然な点に気づいた。

なんであんな近くに地平線が見えるのだろう。

地平線は普通、遠くに見えるものだ。それは地球が丸い事を意味する。だから、あんなに近くに地平線がみえるのはおかしい。これが夢だといわれたらそれまでだが、いてもたってもいられなくなり、私は痛めた右足を雪面の上で引きずりながら近寄っていった。そしてしばらく歩いていって目にしたもの、言葉を失う。

「……！」

地面が途中で途切れている。

私はそこに座り込み、その先を手で探った。しかし、手は空をき

るだけ。

私は途切れた地面を目で追っていく。どこも同じように、ぶつりと途切れていた。

まさか……球体じゃないの？

私は自分の出した疑問に首を縦にふった。そうだ、きっとそうだ。これは夢だし、そういう事があってもおかしくないし。随分手の凝った夢だなと思うけど。

つまり、ここが夢の世界の“果て”ってことだ。

なんだか、物語の中みたいだと思った。果てのある世界が舞台の物語。ちよつと読んでみたいかもしれない。

私は足に負担をかけないように立ち上がる。さて、これからどうしようか。体がぐつと重くなる。

そして広がる雪面をじつと見ていると、ある一点が不自然に凹んでいることに気づいた。

なんだろ。

ここにいたら落ちそうで危ないしと、私は再び右足を引きずりながら歩き始めた。夢だから落ちても大丈夫だと思うけど。むしろ目が覚めるかもしれない。けれど残念ながら、ここから身を放り出す勇氣は私にはなかった。自然に目が覚めるのを待つほうが、精神的に楽だ。

右足を引きずりながら、ゆっくりと目的の場所へ近づいていく。雪面の上だからよい速度が遅く、結構な運動になった。しかし、普段から部活で鍛えている私にとってはそれほど苦にはならない。

「……あ」

凹みが目に入る。そこには、真っ白な雪と対比して、真っ黒な木製の扉があった。

「……地下？」

首をひねる。十中八九、この扉を開ければ地下に入れるだろう。地下なら、いくら外がこんなでも、それほど寒くはないだろう。いくら夢でも、わざわざ自分の身体を痛めつけるような真似はしたく

ない。できるだけ楽をしたい、とはいくらかい気分のしない願いかもしれないが、今の私にとっては切実な願いだ。

私は扉の取っ手を掴んだ。

この扉を開いたら自分の部屋だった、とかあれば万々歳だな、そんな事を思いながら。

03 地下

すごい。

それしか言えなかった。ただの地下ではなかった。地下鉄はもちろん、今流行り^{はや}のデパ地下なんて比じゃないくらいすごい。むしろ比べることさえ愚かしいと思えるほど。

地下には、街が広がっていたのだ。

「……っ」

目の前に広がっている光景に、息を呑む。

こんなに深く掘って、水は出ないのだろうか。このあたりには何も無いのかな。

私はその街のあまりの大きさに目が眩んだ。これは……すごい。

私が見える範囲では、どうやら今私がいる場所から一番下まで、螺旋状に階段や下り道になっているようだった。その脇には数多くの店があり、下の方の道脇には田んぼや畑、水車、酪農場のような物が見える。そして一番下、中央にはたくさん家、教会や、家の倍以上に大きい何かの施設の様な建物が密集していた。そして私がいる場所から下までの高さは東京タワーの展望台から外を見下ろした感覚に近いから、多分それくらいの高さだ。

すごい、本当にお話の中の世界みたい。

私は感動のあまり、しばらく放心していた。

しかし、意識はすぐ現実——まあ夢の中の世界だけ——に戻される。

「*****」

「えっ？」

声のした方を見ると、そこには大きな荷物を抱えたお爺さんの姿があった。何を言っているのか聞き取れない。だが仕草や表情からして、どうやら道を開けてほしいようだ。そういえばここは地上への扉のすぐ下。通路の邪魔なのは一目瞭然だ。

「あ、す、すいません。今どきます」

とりあえず私は端っこに寄って頭を下げた。するとお爺さんは一瞬目を見開き、すぐに顔を綻ばす。

「*****? *****」

そうよくわからない音を発して、お爺さんは私に一枚の毛布を突き出した。暖をとれ、と言っているのだろうか。

私はうるたえながらも、多分通じないであろう日本語で「ありがとう」と再び頭を下げ、にこっとお爺さんに微笑んでみせた。するとお爺さんは満足そうに頷き、扉から地上に出て行った。

私はお爺さんを見送り、毛布を肩にかける。とても暖かい。そして、

「ふう……」

と一息ついて、そのままその場に座り込んだ。

……言葉が通じないって、なんて非情な夢なんだろう。

困ったなあ、そう頭をかかえる。さっきはなんとかあったけど、込み入った話を言語の疎通なしにできるとは到底思えない。まさか夢の中で悩む日が来るとは思わなかった。

……というか夢、早く覚めないかな。

なんかもう嫌。どつと疲れた。寒いし、足痛いし、心なしが頭も痛くなってきたし……ホント早く夢覚めてほしい。

私は心の中で毒き、腕の中に顔を埋める。

……私、邪魔、かな。

目にはしなくともわかる目の前を通り過ぎる多くの足音。多分、いや絶対私は邪魔だ。いくら端いえど、一応ここは道だし。というかなにか食べ物のお店のお店のすぐ隣だし、営業妨害になっているかもしれない。

自分の夢に出てくる人達に気遣うっていつのも変な話だけど、でもやっぱりここはどこか邪魔にならないような場所で夢が覚めるまで待つべきだと思う。

しかし私が立ち上がる前に、どさっと何かが目の前に置かれる音

がした。

「……………」

恐る恐る顔を上げると、目の前には紙袋が。
なんだろ、これ。

すつと手を伸ばし、中身を確認する。

「……………っ！ これ……………」

紙袋の中には、熱々の蒸しパンが入っていた。

私はすぐにキョロキョロと周りを見回したけど、通り過ぎる人たちは皆私の事なんてどこ吹く風だった。誰だろう、こんなものをこんな所に置いていったのは。これ、私が食べてもいいのかな。……………あ、もしかして。

「……………物乞いに勘違いされちゃったのかな？」

こんな格好だし、大いに有り得る。

私は教科書で見た物乞いの人が写された写真を思い出す。ぼろぼろの姿で道端でただじっとしている人たち。……………たしかに、今の私はボロボロだけど。けど、やっぱりなんか、複雑な気分だ。

私はなんともいえない表情で、しばらく蒸しパンを見つめる。

……………なんか、さ。うん……………なんつか。

「……………妙にリアルな夢だよね」

正直、薄気味悪いというかなんというか。ほんの少し、心細くなる。

しかしそんな私の心境を無視して、お腹はぐう、と立派な音をたてた。

「……………あー」

食べよう。私がもらったみたいだし、食べちゃおう。
はぐ、と私は蒸しパンにかぶりついた。

「っ！」

……………しかし、どうやらまだ食べるには早すぎたようだ。熱い。舌痛い。

地味に舌を火傷した私は、しばらくの間蒸しパンを睨みつけた。

03 地下（後書き）

登場人物を追加することにしました。

主要ってほどではないかなあ、と考えていたんですけど、話的には大きな役割を果たしてくれるので。

お頭とターニヤの二人です。お頭名前ない（笑）

『地下』はまだ続きます。

なんだかんだで蒸しパンを綺麗に平らげた私は、とりあえずこの場を離れる事にした。

私は下へ下へと道を下つていき、どこか突つ立つていても邪魔にならないような所はないかと隅々まで観察する。残念ながら、今のところ適当な場所は見つからないけど。店と通り過ぎる人たちだけが目に入る。

……それにしても。

「……随分と国際的な顔ぶれだね」

さっきのお爺さんは日本の顔立ちをしていたけれど、行きかう人たちはアメリカ、スペイン、中国、様々な顔立ちをしている。けれどそんな顔立ちの違う人たちがぼんぼんと言い合いをしているのを見ると、顔立ちが違うからと言って言葉が通じないわけではないんだなと実感した。英語的感覚なのか、あるいはこれが夢だからか。どうせ言語を共通にするなら日本語にしてよと思うけど、この夢は私が創りだしたもの。なんの文句も言えない。

私、意外と創造力があつたんだなあ。

驚きだ。今までお世辞にもよろしくない評価を受けていた芸術系の科目。自分は専ら体育会系だと思っていたから、今回の夢は私に衝撃を与えた。今年の夏は良い絵が提出できそう。

「あ……あそこがよさげ」

何件か先の店とその一つ先の店の間に、大きめな隙間が見えた。多分、路地裏か何かだろう。

私は右足を引きずりながらも、歩く速度を速めた。一歩進むたびに、右足に弱い痛みが走る。

「お、当たりじゃん」

私はその路地裏をしげしげと見る。そんなに汚くないし、人はいないし。奥のほうは真っ暗でどうなっているかよくわからないけど、

邪魔にならないようにすればいいだけだから、そんなに奥に入る必要はない。私は表通りから抜け出そうとした――が。

「*****？」

突然、背後から女の子の声が聞えてきた。遅れて肩に手が乗る。

「……えつと」

私に声をかけたのだろう。無視するわけにもいかず、仕方なく後ろを振り返った。すると、目の前には褐色肌の女の子が。

「わあ……」

すっごい、美人。

女の子は私が振り返ったのを認めると、肩上で揃えられた艶やかな黒髪を揺らして微笑んだ。誘うように瞬く黒目勝ちの瞳。キリッとした眉毛。すっとした鼻筋に血色の良い唇。そして肌と対比して真っ白のワンピースからのぞく長い手足。どれをとっても一級品で、思わず感嘆のため息をもらした。特にゆったりとした服の上からでもわかるバストは、見る人を赤面させる。

私はそのバストから目を逸らした。

「*****」

その女の子は私を舐めるように観察すると、何か納得するように頷いた。

何故か、申し訳ないような気持ちになる。

「……*****、*****？」

女の子は何かを問うように首を傾げた。しかし、私には彼女の言葉がわからない。つい黙り込んでしまう。

女の子はしばらく黙って私を見つめて、破顔した。

「**、*****、*****、*****」

そして私に背中を向ける。ひらりと右手を振って、人の波に消えてしまった。

……なんだっただろ、今の子。

首を傾げる。

「……ま、いつか」

考えただけ無駄だし。私はそう口に出して、路地裏へと足を踏み込んだ。

「このへんでいいかな」

私は比較的綺麗で、表通りからそこまで離れていない場所で立ち止まった。砂利は少し痛そうだけど、我慢だ。

ゆっくりと座りこんで、壁に背もたれる。

「あーあ……疲れたあ」

夢なのにね。

私は苦笑いをして、はあ、とため息をついた。ホント、ただの夢なのに、なんでこんな目に合わなきゃいけないのだろう。足の怪我だって、リアルにしたわけではなくても痛みはちゃんとあるし。頭もガンガンするし。妙にリアルな光景も薄ら寒く感じる。今回の夢、普通の夢と見せかけて、もしかしたら悪夢なのかも。目を覚ましたら汗がすごい事になってそう。

「早く覚めないかなあ、夢」

私は再びため息をついて、目を伏せた。

足元にぐしゃぐしゃに丸められた紙が転がっている。

私は何気なくそれを広い、紙を広げた。

「—————」

しかし、中身を見る前に怒鳴るような声がすぐそこから聞えて、

私はその紙を握り締めて顔を上げた。

……え？

路地裏を覗く表通りに、中年の男が立っていた。

こちらを凝視しているのが、遠くからでもわかる。

さっき怒鳴ったの、あの人かな。

……うん。距離的に、多分あの中年の男が怒鳴り声の主だ。けど、なんで私を見て？ ……もしかしてここ、立ち入り禁止？

でもそれっぽい看板はなかった、と私は眉を^{ひそ}顰めた。なにがなんだかわからない。

どうしたものか、と困っていたら、今度は後ろ——路地裏の奥から声が聞えてきた。

「*****！」

私は思わず立ち上がり、奥のほうに目をやった。暗くてよくわからないけど、男のシルエツトが——何人も。

「……っ！」

私はなんだか不穏な雰囲気^{ふんき}に息を呑んだ。

そして男たちは一斉にこちらへ向かって走ってくる。

「はあっ?!」

獲物を狙う肉食獣のような目。しかし、彼らから逃げても、その先には中年の男がいる。

……でも、幾人の男のところに飛び込むよりは、あの中年男を押して逃げることが可能。

状況がよく飲み込めないが、どうやら今自分が窮地に立たされているらしいことを本能的に悟り、私は足の痛みを忘れて中年男に向

かつて走り出した。

そして私の腕を掴もうとした手を払い、思いっきり中年男の腹に拳を食い込ませる。

そのおかげでできた一瞬の隙を狙って、私は彼と壁の間を潜り抜けた。

「わっ」

すると、さっきの女の子が目を見開いて私を見ていた。

思わず立ち止まりそうになるのを必死にこらえ、私は女の子を見つめながらこの場から遠ざかる。

女の子は我に返ったように、中年男の体を揺すった。

「なっ……」

仲間、だと？

私はぶっふん、と頭の中で何かが切れるのを感じた。

丁度その場に転がっていた小石を女の子目掛けて投げつける。

見事、命中。

私は女の子がこちらを振り返るより早く人の波に紛れ込んで、彼らから離れていった。

05 地下 - 3 - (前書き)

前回の補足。

白いワンピースを着た黒人の女の子は、ストッキングをはいています。かなり厚めの。

冬っていうか、とても寒いので、ワンピース一枚じゃ耐えられませんか。

なんだか一人夏服でも余裕ぶっこいているような描写になってしまったので、一応ここで補っておきます。

何今の。ワケわかんないから。

追われるような、襲われるような事をした覚えはない。第一これは夢なはずだ。何が嬉しくて夢の中で追われなきゃいけない！

「……かんべんしてよ、もう……」

もう、終わりにして。

いいかげん目を覚まして。

けれどそれが叶うことはなく、今も私は逃げ回っていた。逃げ込む場所なんかないくせに、必死の形相で逃げる自分。奴らはきっとまだ私を探しているだろう。何故私を追うのなんてそんな事は知らないけれど、今自分が窮地に立たされている事だけはわかり、背中を流れる汗が冷たい。

されど夢、たかが夢……なのに。

「……なんで、こんなに不安な気持ちになるの」

夢なら、何が起きても自分の身は安全なはずなのに。現実には支障はないのに。

何故か必死で逃げ惑う私。

何故こんな必死になるのか、何故こんなにも不安になるのか。

「わかんないんだよ、ホント。なにがなんだか……ああもうっ」
胸糞悪い。

私は店と店の間の隙間に入り込んだ。細い。子供と女くらいしか入れなさそうな所。

「……くっ」

体中を電流が駆け巡る。

ここまで来る途中、私は右足の靴をなくした。毛布もどつかいってしまった。髪はボサボサで、服は乱れた。あるはずの寒さを感じないほど、走って汗をかいた。時機、そのせいでとっと冷えるだろう。

「……ふ、あ」

目頭に熱がこもる。

私はそこをこしこしと擦った。

「く……」

痛い。

私は苦しげに右足を見下ろした。踝丈の靴下をはいていてわからないが、多分相当いためているはずだ。でも今の私には治療なんてできない。ただ痛みは増幅し、足はひどくなるしか道はない。

「……って、バカみたい私。これは夢なんだから、別にマジで考える必要ないじゃん」

そうだ。なのに、なんでさっきから私はこうも今自分の身に起こっていることに危機感を覚えているのだろう。無駄すぎるってば。私はぎゅっと目をつぶり、唇をかみ締めた。下唇が緊張するように硬くなる。

そして今更ながら、右手に捕まれている紙の存在を思い出した。更にぐしゃぐしゃに丸められた紙を少しずつ開いていき——硬直する。

「なに……これ……」

その紙には、一人の少女の顔が映し出されていた。

その他何か文字らしきものが書かれており、さっぱりわからない。

ご丁寧にも、少女の絵はカラーだった。

「これ……どう見ても……」

横に流しピンで留めた前髪。後ろで小さく団子にくくった黒髪。

日本人的な顔立ち。

紙に描かれている少女は、私の顔をしていた。

もう、どれくらいここにいるだろう。

私はぐしゃぐしゃな紙を見下ろして、動かない。

なんだろう、これ。なんで私の顔が描かれているの。

「……このっ！」

私はびりびりつとその紙を引き裂いて、乱暴に捨てる。

「もうやだぁ……」

右足の痛みは増していく。寒さは最高潮。がくがくと震える体。

座る広さもない場所のため、どんなにつらくても私はその場に立っているしかない。できれば移動はしたくないから、きつと夢が覚めるまでこのままだろう。

ここが一番安全なら、私はここを動かない。

「……う」

心なしが、お腹もじんじんと痛み出してきた。寒さのせいだろう。

「毛布……」

捨てるつもりはなかった。ただ、あの大きな毛布を持って走る余裕がなかっただけ。けれど、意地でも持っていればよかったと今更後悔した。あれがあるだけで、今の状況もいくらか変わっただろうに。

私は目を伏せた。過ぎた事は仕方ない。

今はただ、ここで目が覚めるのを待つのみ。

「——***、*****？」

突然、声が上から落ちてきた。
ぎゅっと、身が縮まる。

まさか……さっきの奴ら？

恐る恐る上を見上げると、後ろの店の屋根から、一人の男が私を見下ろしていた。

目が合う。

「……*！」

そして驚くように目を見開く男。その表情を見た瞬間、びびっと私の体は震えた。

逃げなきゃ。

ほぼ本能的に、私は走り出していた。ぼろぼろの体で、無理をして。

「*……** *！」

私は奥へ、奥へと逃げていく。この道なら、さっきの男が入ることとはできない。けれど、一点に留まっていたら、武器なんかで私を傷つける事はできるかもしれない。しかし走っていれば、常に動いていれば、それはかなり難しい事のはずだ。

しかし、後を追ってくる足音が聞えた。

屋根の上を走る音ではなく、ちゃんと地面を、砂利の上を走ってくる音。

私はちらりと後ろを覗く。

「なっ……」

おん……な……？

そんな馬鹿な。私は走りながらも、動揺を隠せず、息を荒げる。周りの音に集中すると、自分の足音と後ろの女の足音、そして屋根の上を走る足音が聞えてきた。

「……そういうこと……」

あの男だけじゃなかったのだ。見えなかったが、どこかに女もいたのだ。

まずい、と思った。

何がまずいのかは、わからないけど。

「
**、
**、
**！

**
**
**、
**
**
**
**
**

**
**
**
**
**
**
**！
」

後ろで女が何か言っているが、何を言っているのかはさっぱりだ。
この二人も……さっきの奴らの仲間だろうか。

この夢で出逢った人たち全員が私をおってくるわけではない。ごく一部だ。強いて言うなら、ガラの悪そうな奴らばかりが。

じつくり見ていないので断言できないが、後ろの二人もあまりやさそうな外見をしていなかったと思う。

まだ二人は私に追いついていない。怪我をしても、足には自
身がある。しばらくは追いつかれる気がしない。

けれどこのまま走っていたら、必ずいつかは追いつかれる。

「くそっ！」

そう私が荒げた声を上げたその時、背中から鈍い痛みが走った。

その拍子で、私はその場に崩れ落ちる。

「
*、
*
*
*
*
*
*
*
*
!」

「*****！」

意識が朦朧とする中、男と女が言い争う声だけが頭に響く。そして暗転。

やっと夢が終わるんだと、私の唇は笑みを象った。

05 地下 - 3 - (後書き)

これで『地下』は終わり。

次からは『賞金首と賞金稼ぎ』です。

06 賞金首と賞金稼ぎ

くすぐつたい。

服越しに肌にざらつく感触。堅くて、ちょっと重いなにかが私の体を覆っている。なにな、くすぐつたいな。そう思い眠たげに目を開ける私。徐々に開いていく視界——見知らぬ世界。

……どこ、ここ。

見慣れない場所を見たせいか眠気が吹っ飛び、私は目を見開いた。狭く薄暗い室内。室内を飾るアンチックな家具に、同じくそこかしこに置かれているアンチックな置物など、結構マニア感の溢れる部屋。知らない内に私が寝ていたベッドは現代日本で定番の物と比べると随分固く、機能が成っていない。

これ、この雰囲気。

私はため息をついた。

「まだ、夢の中なの」

そして夢の中で寝ていたのか私は、と眉を顰める。夢の中で寝るとか、そんなこと本当にできるのだろうかとも思うが、現に私はできていたみたいなので追求しない。というか、それ以前に考える体力がないようだ。

なんだかぼーっとしていて、だるい。

そのせいか今自分が置かれている状況について把握することもせず、再び私は眠りに入った。浅い眠り。

しかし話し声が聞えてきて、私は目を覚ました。

「*……* * * * *」

女の、声。

一瞬にして眠気が消え飛ぶ。思い出した。私、追われてたんだ……って事は。

恐る恐る声のする方へと目を向ける。

「* * * * * ? * * * * *」

お話の中に出てくる盗賊のような格好をしているその女は、格好の割りに優しい風貌をしていた。淡い色の金髪に、灰色の瞳。愛らしい垂れ目だ。身長は日本の成人女性の平均よりずっと高く、体もでるところはでて、でないところはひつこんで、といった感じ。

そして隣には彼女より頭一つ分は大きい同じく盗賊風な格好の男。配色は鳶色の髪に瞳。眼光はナイフのように鋭く、眉毛がない。代わりにとでも言うように、額から目を超え左頬にかけて、大きな傷がある。丸太のように太い手足とがっちりとした胸板が、一般的日本人男性とは似ても似つかない。

二人とも年齢は三十を超えている印象を受ける。

間違いない。私を追っていた二人だ。

「……ぐあつ」

思わずここから逃げようと体を起こしたら、びびっと全身が痺れて私は苦しげに呻いた。体が思うように動かない。

「*、***・***」

駆け寄ってきた女は安静にしてるだけでもいうように、私に毛布を掛けなおして真っ直ぐに見つめてきた。思わずその顔に見入る。

…… 外国、人。

差別はよくないとはわかっていても、外国人をみるとつい怯んでしまうのは私の悪い癖だ。英語なんて話せないから尚更。

勘弁してよ、私、こういうの苦手なんだから。

同年代の日本人の子とかは大丈夫なのに、大人や外国人とのコミニケーションはどうも怖気づいてしまい、うまくできない。ついでが小さくなる。

私は彼女から目をそらし、口を一の字に結んだ。この二人、私の事追いかけてきたけど、一体何が目的で追いかけてきたんだろう。あの時は敵意丸出しな感じを受けたのに、今はそうでもない。……いや、男の方は結構今も敵意丸出しかな。ちよつと、怖い。

私が目を開いたままだいると、女は優しい表情で話しかけてきた。だが、私には彼女たちの話す言葉がわからない。どうしたものかと

困っていると、女が急に口を閉ざした。ずっと私が口をぱくぱくしていたからだろうか、訝しげに眉を顰めて、それからなにか閃いたようにあつと声を上げた。

間をおいて彼女は口元で人差し指で罰印をつくり、首を傾げる。私は声は出せる、けど言葉を話せないという意味をこめて、あー、と声を出しながら首を縦にふった。すると女は困ったように口をへの字に曲げ、いつのまにかそばに腰を下ろしていた男になにか話しかける。

男はその言葉に呻った。それからしばらく室内は静寂に満たされる。

「……ルミナ」

沈黙を断ち切るように、女は彼女自身に指を向け同じ単語を繰り返した。そして今度は男を指差して「アルド」という単語を繰り返す。

名前、かな？

その動作から十中八九名乗られているのだと認識し、私も彼女に倣い、自分を指差して言った。

「永田有菜……有菜、有菜」
ながたゆうな

「……ユーナ？」

「ん、ユーナ」

女はユーナ、ユーナ、と繰り返すつばやき、顔を綻ばした。男の方は相変わらずガラが悪い、不貞腐れた表情かおをしている。

私は女を指差してルミナ、男を指差してアルドと言い微笑んだ。
ぎこちない表情で。
かお

……だって、やっぱりこの人たちは怪しい。私の事を追ってきたし。けれど、今私に寢床を与えてくれているのは彼ら。そして私の体は本調子じゃない。だから、調子がよくなるまでこの人達にお世話になるう。よくなったら、様子を見てここから抜け出そう。

調子の悪い時に何かされる可能性もあるが、だったら私が倒れた時に殺すなりなんなりしているはずだ。としたら、目的はなんだろう。

う。悪人面で追ってきた事からして、怪我をしている私を治癒しようと親切心で私をかくまっている、というのはまずない。私の調子がよくなったら、何かしたいことでもあるのだろうか……一体何を？ 全然思い浮かばない。

まあ、どうせこの体でここを抜け出すのは無理。男の方にあっさりと連れ戻されてしまうのがオチに決まっている。

……というかこれ、夢だしね。

あまりのハードな展開続きで思わず状況把握して打開策をつくってしまいが、そういえばこれは夢。何かあってもまあ、どうにかなる、と思う。

そう物思いに更けていると、額に冷たい手が当てられた。そこで初めて、自分が熱だということに気づく。

どうやら右足の方はすっかり大丈夫みたいだけど……。

これは、数日はここを抜け出せそうにないなと私は目を閉じた。

それから数時間ぐらい寝て起きたら、そこは変わらず例の部屋で、おまけに真つ暗闇だった。

なんでだろう、と首をかしげ小窓から外——地下だけ——を覗くと、さつき逃げ回っていた時より随分と暗かった。うん？ とさらに首をかしげ私は考えこむ。そしてあ、と声を上げた。

「そういや、あの時はそこかしこに提灯があつたっけ」

今はその明かりが全て消されているということ。

ここは地下だから、提灯の明かりの有無で昼夜を分けているのだらうか。

じゃ、今は夜なのかな、と私はぼんやりと考えた。夜なら、再び寝たほうがいいんだろうけれど、さすがに寝つかれた。体は本調子じゃないから横にはなるけど、眠りに入るのは無理な気がする。

とりあえず私は横になった。そして初めて自分の服が代えられていた事に気づいた。途端、ぐう、とお腹が音をたてる。

「ユ……」

お腹が空いた。

どうしよう、と周りを見回せば、小さな丸いテーブルの上に、スプー
プのような液体の入った鍋があった。その横には取り皿。スプー
ンは、ない。

私は有り難く頂戴しようとしてゆっくりとした動作で起き上がった――だが。

*

 *
 *

 L

⌈
⋮
*
*
*
⋮
⌋

遠くから囁き声が聞えてくる。

そしてその声はみるみるうちに大きくなり、私は思わず再び毛布の中に入った。ぎゅっと目をつぶる。

「
*、
**

*****?

*****?
」

「*****」

「*****」

「*****」

アルドの怒気を含んだ声に、ルミナの弱弱しい声。沈黙が訪れ、ルミナも怒気を含んだ声で言い返す。

「**、*****！」

その言葉に、アルドがため息をついた。多分、あきれているのだろっ。

「*****」

「**、*****！*****、*****」

「*****！」

「*****？」

「*****」

ルミナが最後に何か言ったきり会話が途絶えた……と思つたら、頭を撫でられた。うん？ 違う。ピンだ。ピンを触られている。

今更だが服は代えられていたのに、髪型は崩されていなかったことに気づき、私は心の中で首をかしげた。普通、ほどこしてくれるだろうに。

「*？ **、*****」

「*****」

そしてピンに触れられていた手が離れる。間もなく彼らは部屋の外へと出て行った。

一人、ほつと息をつく。

言葉はわからなくとも、決して温和な会話ではないことはわかった。

……はやく、元気になんないかね。

そしてこの家を出るのだ。行き先はないけど、とりあえずここを出て行く。

この夢が覚めるまで、敵か味方かもわからない人間と暮らすのは御免だ。

「……ん」

私は寝返りを打ち、再び眠りに落ちていった。

それから不可思議な世界を彷徨う夢から覚めることなく、二日がすぎた。

この夢を見始めてから、二日目の夜、真夜中だ。

この二日ですっかり熱は下がり、体の痛みもなくなった。二日の間、ご飯や着替えなどの世話をしてくれたルミナのおかげだ。その間に私は彼女たちの使う「おはよう」、「おやすみ」、「ありがとう」、「ごめんなさい」の四つの言葉を覚えた。別に彼女が教えてくれたわけじゃない。ただ、よく使う言葉のせいか自然と覚えてしまったのだ。表情と照らし合わせるとわかりやすい。

私は制服を着て厚めでぶかぶかのコートを羽織る。髪の毛もいつもどおり団子にくくり、すみれ色のピンで前髪を留めた。足元にはバスケット。中にはお湯の入った魔法瓶と布で包まれたパンと木の実。あとは厚めの毛布。ここでの通貨を入れた缶。運動靴は外に出てから履くつもりだ。

私は昨日の夜、この家について大体把握した。部屋は二つ、釜戸のある小さな部屋が一つ、トイレが一つ、外には風呂、物置小屋。あの二人が寝ている部屋には廃れた家具が多く、たぶんあそこはアルドの部屋だ。そして私が寝させてもらっているアンチックな部屋はルミナの部屋。今羽織っているコートはこの部屋のクローゼットから頂戴した。ルミナの物だから、ぶかぶかではあるけれど着れない事もない。バスケットもこの部屋にあったもので、食べ物は何の分からはれないように引き抜いた物だ。毛布もこの部屋のベッドに付いていた奴だ。私の所持品はベッドの下に収納されていた。

そして魔法瓶は夕方風呂に入る際物置小屋から盗み出してきたものだ。中身は、不本意だがお風呂のお湯。お金は柵を移動させたら引き戸があつて、その奥にあったものだ。

紛れもない犯罪。自分がいけない事をしているのは十分に承知しているが、今はそんなこととやかく言っている場合ではない。行こう。

私はバスケットと運動靴を手に持ち、忍び足で部屋を出る。

玄関に行く前に、あの二人の寝ている部屋を覗いた。金髪がベッドから流れ落ちていて、夜目にもわかる。アルドの顔が見えないが、きつと毛布に覆われているのだろう。この家にあるベッドはキング並みに大きい。

よし、あの二人はぐっすり眠っている。大丈夫、きつといける。

私は音を立てないように慎重に足を運び、玄関の扉の前に立つ。

この扉の鍵は私の家の鍵と大差ない。カチ、と音を立て、私は内側からの鍵を空けた。そしてゆっくりと扉を開く。

…… やっぱ、寒い。

私は身が縮むのを実感しながらも、音を立てずに扉を閉めた。吐き出した息が白い。

夜の静寂。

この時間におきているといったら、残業のある奴や夜の仕事をしている奴、あとは悪さをするような奴らだろう。できれば人には会

いたくない。けれど道を進みどこかよさげな所を探す必要がある。そうだな、空き小屋がいい。……あ、教会はどうだろう。今の時間やっているだろうか。やっていなくても、入り口の前にいれば安全だ。教会なら場所はすぐわかる。ここは住宅街の一角。だから教会のてっぺんがどこからでも見てとれるのだ。

「……ラッキー、結構近いじゃん」

歩いてもそんなに時間がかからなそうだ。私は教会のある方へと足を進める。広い道、細い道、道と言えるか不安な隙間、細い道。誰か人に会うこともなく夜道をぐんぐんと進んでいく。

そろそろだ。

私は口端を嬉しそうに上げ、真っ直ぐの道がなくなったので角を曲がる。

すると、急に雰囲気が変わった。

「え……」

廃れた雰囲気。建物の窓からもれる明かり。酒の匂い。風に乗って聞えてくる厭らしい笑い声。

どうしよう。

まさか教会のそばにこんなところがあるだとは思ってもよらず、私は立ち止まる。ここらへんに並んでいる建物は一般家庭の家ではなさそうだ。店。上の方に並んでいた店とはまた違った雰囲気の、店けれど進まないわけにもいかず、目的地はすぐそこだと気合を入れなおして歩き始めた。できるだけ教会寄りを歩く。

すると、近くで物音が聞こえた。続いて罵声と笑い声。

首が竦む。

私は音を立てずにそっとその場から離れて、建物の影に隠れた。そしてその建物の壁に貼り付けられた数多くの紙切れを目にして、声を上げそうになる。

暗くて見えなかった、紙切れ——私の顔が画かれた、紙。

脳裏に蘇ってくる、私によって裂かれた一枚の紙。

思い出した。すっかりその存在を忘れていた。

他にも私以外の人間の顔が描かれた紙はたくさんあるけど、私のは他の人の物と同じくらいのサイズの紙が数枚、そして他のどの紙よりも大きい紙が一枚。

なんで。

私は目を疑う。目の前の無表情な私を、食い入るように見つめる。改めて観察していると、目の前に張巡らされている紙に何かが重なった。

何だろう、何だろう。こんな感じの紙、見たことある気がする。

「……っ」

——あれだ。

私は喉まで出掛かった言葉をぐっと飲み込む。

あれだ、なんか、少年漫画に出てくるやつ。なんだっけ。いつちやんとか男子とかが好きな漫画……アニメなら、私も小さい頃見た記憶がある。

海賊が主人公の漫画だ。あれ、たしかコマーシャル入ろうとする時や終わろうとする時に出てくるやつ……。

なんていったけな、と私は首をひねる。……駄目だ全然思い出せない。紙の名前は思い出せないけど、こういう人間の絵が描かれているかは覚えている。

たしか、賞金首、だ。

意味的には罪とか犯したために賞金をかけられている人たちのことだったような。指名手配者みたいな。……あつ、そうだそうだ。

指名手配書だ。この紙、指名手配書に似てるんだ。

そこまで考えて、うん？ と首を捻る。

似てるっていうか……同じ？

頭の中に蘇ってくるのは、今まで私が追いかけられた時の事。もし私が彼らに『賞金首』として認知されているのならば、追いかけられたりしてもおかしくないんじゃないだろうか。私に賞金がかけられているから、見知らぬ人間に追われる羽目になったんじゃないだろうか。

なんで、また。そんな設定が。

瞳が揺れる。わからないこと続きで頭がパンクしてしまいそうだ。

……これが私の夢だから、特別扱い、みたいな？

私は口を噤む。

そして無心に紙に手を伸ばした。

07 賞金首と賞金稼ぎ - 2 - (後書き)

異界語多くてすみません^^;

全部ではないですが、重要な部分は章と章の間に入るEXで明かされるのでしお待ちを。

今は裏事情がまったくわからない状態です。

壁に爪をたてた。

ビリビリと引き裂かれる数多くの指名手配書。傷つく爪。引き裂かれた紙は足元にひらひらと舞い落ち、夜風に攫われ暗闇へと消えていく。

「
|
*
*
*
?
!
」

案の定騒いでいた奴らがこの異質な物音に声を上げた。

そして間髪入れずに足音が聞こえてくる。どんどんその音は大きくなり、一旦止まった。目端で覗くと大小様々の三つの影が揺れている。

「*
*
*
！」

そして奴らはその姿を露わにした。

左からひろ長男、太った男、小さい年増の女。

彼等は荒らされた壁を見て一瞬怯み、私を目にして目を見開いた。そして実に厭らしい笑みを浮かべる。

「*****！」

[illegible]

「*****！」
——
*****！」

そしてその三人の人間は一斉に私に飛び掛つてきた。

三人とも腰に収めていたそれぞれの武器を出す。

ひよる長い男が短槍、右の年増女が大振りのナイフ、そして真ん

中の太った男が――長い、棒。

気づけば、私は手に持っているバスケットで三人の顔を殴っていた。そして素早く太った男の上に乗って棒を両手で掴む。

「さっさと棒よこせ、このデブ！」

ほぼ無理やり男から棒を奪い取り、私は大通りに出た。蹲つづくまつた三人はバスケットから飛び出て割れた魔法瓶の破片で、所々血を流し

ている。

ざまあみろ。

もう、私に良心なんてものは残っていなかった。

人を傷つける事を躊躇わなかった。

私は無意識に足を左右並行で握りこぶし一個分ほど空き、左足のつま先を右足のかかと辺りにずらして左足はかかとをすこし上げ、爪先立ちになった。

棒を竹刀と思い、剣道の技で敵をしとめようとしたのだ——だが。

「……っ」

剣道は、相手も剣道の構えをしていないと役立たずの武法だという事を今更思い出し、呆然とする。

なに、やってんだろ、私。

こないかにも戦いなれているような人たちに勝つ術なんてどこにもないのに。一介の女子中学生が大の大人三人に力で勝てるはずがないのに。それなのに、なんでわざわざ自分から喧嘩を売っているのだろう。

なんでさつき、逃げなかったの。私らしくないよ。

吐く息が震える。視界が濁り、足もがくがくと震えている。

私が賞金首なら、襲ってくるあの人たちはきつと賞金稼ぎだろう。この間の黒人の女の子たちも、私をかくまってくれた二人組みの男女も、みんな、みんな私を狙っていたのだ。

「……ふざけないでよ」

お腹から出した声は低く、掠れていた。そして泣き喚くように叫ぶ。

「ふざけんなよ、死ねよ、全員死ねっ！ みんなみんな、死んじゃえばいいんだあっ……！」

馬鹿みたいに地団駄を踏む。三人は起き上がり、私を射るような目つきで睨んでいる。そして豹のごとく私に向かって走ってくる。

その場を動けない自分に、私は啞然とした。

拳が、槍が、ナイフが、私にどんどん近づいてくる。

「……………」

終わった、と思ったその時。

ヒュン、と太った男の前に長めの刀が突き刺さった。

ぶらん、ぶらんと柄が揺れる。

「え……………」

その刀の紋章を見るなり、彼等の顔はみるみるうちに青ざめていく。

何がおこったの？

私が固まっている間に、太った男の体が大量の血が噴き出していった。

男はどさり、とその場に倒れる。

背中には、三本の短剣が。

「っ……………！」

死んだ。

絶対にあの人、死んだ。

私はいてもたってもいられなくなり、気づけば狂うように泣き叫んでいた。死んでほしいと思った。けれど、実際に死なれると、なにがなんだかわからなくなった。錯乱状態。この涙はなんの涙だろう？ 私は、あの太った男を思って、泣いているのだろうか？

違う、と心の奥底でだれかが言った。

違うよ、『私』を思って私は泣いているんだよ、と。

「……………私のために？」

一気に脳裏に映像が流れていく。

乱れる車の列、駆け寄ってくる足。あの時最後に、最後になにかもう一つ見なかっただろうか。

男の体からどくどくと流れ出る、赤い血。

「……………！」

血。

私があの時本当に最後に見たのは、真っ赤な血だ。

だれの？ なんて口に出せるはずがなかった。

， ， ，

08 賞金首と賞金稼ぎ - 3 - (後書き)

こんな暗くするつもりはなかったのに…涙

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6766m/>

賞金首と果てある世界

2010年10月8日12時18分発行